

聞き取り調査

西南学院中学部・高等学部卒業生 吉田一之氏に聞く

戦前・戦中の苦難の時代を 学生として過ごす ～西南学院存亡の危機を身をもって体験～

実施日：2011(平成23)年7月27日

実施場所：西南学院100周年事業推進室

吉田一之氏と高等学部の略歴

1921(大正10)年4月	西南学院高等学部 (文科・商科)開設
1923(大正12)年4月	高等学部に神学科 増設
1935(昭和10)年4月	高等学部3年制となり、 文科は英文科、商科は高等商業科と改称
1936(昭和11)年4月	西南学院中学部入学
1941(昭和16)年3月	西南学院中学部卒業
1941(昭和16)年4月	西南学院高等学部英文科入学
1943(昭和18)年10月	西南学院高等学部仮卒業式 西南学院高等学部英文科卒業
1944(昭和19)年4月	高等学部を西南学院経済専門学校と改称
1946(昭和21)年4月	西南学院経済専門学校を西南学院専門学校 (英文科、経済科)と改称



■戦争のため繰り上げ卒業

私は、1936(昭和11)年に旧制の西南学院中学部に入学し、1943(昭和18)年3月に旧制の西南学院高等学部英文科を卒業

するまで、中学部で5年、高等学部で2年7ヵ月、西南で学生生活を送りました。高等学部は、私が入学したときは3年制でした^(注1)が、私が高等学部に入った年に戦争が始まりましたから、私は2年半

注1：高等学部は1921(大正10)年開設以来、4年制だったが、学内の改革により3年制とし、文科を英文科、商科を高等商業科と名称変更することになり、当該申請が1935(昭和10)年1月文部省に認可され、同年4月から実施された。

で繰り上げ卒業になって、3年目の10月に卒業して海軍予備学生となりました。

ちょうど、戦前、戦中の時期に西南で学生生活を送ったわけですが、戦争の影響などを中心に、おぼろげながらも当時の学生生活を思い出しながらお話ししたいと思います。

■1936(昭和11)年

英語のテキストに『古事記』の表紙

この年は、みなさんご存知の2.26事件が起きた年です。私は、この年に西南学院中学部に入学しました。当時は全学的な行事として、新年拝賀式、紀元節、天長節、明治節(明治天皇の誕生日)、招魂祭(幕末からの天皇制政府側に立った戦死者の英霊を供養する行事)、元寇記念日などがあり、全校生徒の出席が原則で、軍事色がだんだん強くなっているころでした。1年生のときに「典礼規範」や「軍隊の基礎学」、「分隊教練」などの科目があって、週2時間、配属将校が教えていましたね。当時、不動の姿勢は軍人の基本精神と言われていたのですが、学期末の試験問題に「不動の姿勢について述べよ」という出題があったのを記憶しています。西南以外の学校の配属将校は大尉、少佐クラスだったのですが、西南は中佐や大佐といったクラスでした。やはり、キリスト教の学校だったから軍の方も公立学校よりも目を光らせていたのではないかと思います。

当時も西新町に喫茶店があって、私も行ったことがあります。よく特高が監視していましたね。特高とは特別高等警察の略称で、当時の天皇制政府に反対する思想や言論、行動を取り締まることを専門にした秘密警察のことです。コーヒ一杯が15銭でしたでしょうか。パチ



1936(昭和11)年頃、特高の目を逃れるために英語のテキストに「古事記」の表紙を貼って持ち歩いた。

ンコもあって、玉10個が1銭でした。ただし、勝っても交換できるのはお菓子だけでした(笑)。特高は、学内にも私服で入り、抜き打ちでカバンの中を調べたりするんです。英語のテキストなんかを持っていると敵国の言語を学ぶとは何事かということになって大変なので、私は、英語のテキストの表紙に『古事記』の表紙を貼って持ち歩きました。そのようにしている生徒は多かったですよ。

■1937(昭和12)年

御真影をおさめた奉安殿を建設

日中戦争勃発の年です。西南の配属将校であった小堺大佐という人が戦地に行かれるということで、博多駅まで生徒全員で見送りに行きました。この大佐が後に杭州湾敵前一番乗りをしたというので、その武勇を新聞等が取り上げ、私たちも勇気付けられたのを覚えています。御真影拝受もこの年です。御真影とは天皇公式の肖像写真で、国から各学校に貸与され、校長が責任を持って管理し、学内の

儀式等に使用されました。しばらくは、学内に保管されていたようですが、そのうちに本館（現在の大学博物館）前の正門から入って右側のところに御真影を設置した奉安殿が建てられました。話によれば、校舎が火災にあっても大丈夫なように隔離された場所に作られたと聞きました。生徒たちは奉安殿の前を通るときは、「歩調執れ！」で歩行することが義務付けられていました。

この年に文部省から『国体の本義』といういわば国定教科書のようなものが出版されました。国が「日本とはどのような国か」を明らかにしようと、学者たちを結集して編纂した書物です。西南の中学部でも国語の時間にこの書物を習いました。試験もこの中から出ましたね。今でもよく覚えています。「氏族制度と武士道精神との精神的比較を論ぜよ」とか「国学が明治維新の原動力となった理由を論ぜよ」とかですね。

キリスト教系の学校に対する軍や一般市民の目が厳しくなり、各所でいろいろな問題が起り始めたのもこの頃からと記憶しています。

■1938(昭和13)年

毎月の神社参拝が義務付けられる

国家総動員法が施行されました。日中戦争が激化していたので、総力戦遂行のため国家のすべての人的・物的資源を政府が統制運用できる（総動員）旨を規定したものです。その頃、火野葦平著の『麦と兵隊』を読んでいたのを覚えています。

この頃、毎月月初めには全校教職員・生徒で神社参拝が義務付けられていました。西南は近くの紅葉八幡宮に参拝していましたが、配属将校の指示により、こ

の年から中央区六本松にある陸軍墓地への参拝に変わりました。私は、この変化は軍部による英霊崇拜思想啓蒙運動以外の何ものでもないと思っていました。

■1939(昭和14)年

授業をさぼって停学処分に

私が中学部4年生の時、第2次世界大戦が勃発しました。この年から週2時間「国民道徳」の時間が設けられました。内容は、当時の時勢に適合した道徳が必要だということで、皇室崇拜、祖先崇拜、神道、仏教、忠君愛国、教育勅語、そういったことを国語担当の小枝先生という方が教えました。これに波多野培根先生が反対されていたのを記憶しています。波多野先生は非常に質素な先生でした。波多野先生からは高等学部に入ってから授業を受けました。

ちょうどその頃、大濠公園に公園座という映画館があって、「戦争と平和」とか「嵐が丘」とかを上映していましたね。どうしても観たくて学校をさぼって観に行ったら「不良狩り」（当時、そう呼んでいました）の先生に見つかって、父兄同伴で学校に呼び出され、佐々木賢治中学部長から3日間の停学処分を言い渡されました。それも今は懐かしい思い出です。

当時、東区の雁ノ巣に飛行場があって海軍予備航空団が使っていました。西南の高等学部の学生も同飛行場での訓練に参加していました。そして、楢木さん（剣道部）、蔵本さん（柔道部）、速開さん（バスケット部）の3人が練習機3機編隊で西南の上空を訪問飛行しました。その時は、確か全校生徒で「セイナン」という人文字を描いて歓迎しましたね。楢木、蔵本の両名は後に特攻隊で戦死しました。

■1940(昭和15)年 キリスト教撲滅運動に反対した 西南の学生

この年になると、3日間連続で地区対抗の軍事教練が行われたり、福岡歩兵第24連隊への1週間の体験入隊、そして1ヵ月に2回ほど38式歩兵銃が貸与されて武器点検の訓練もあり、いよいよ戦争が近いのかなという気持ちになりました。勤労奉仕もよくありましたね。西南学院中学部の担当は大濠公園南側、現在の護国神社付近の整地作業が中心でした。あのあたりは付近に川があり、大雨が降ると一面遊水地帯のようになっていましたから。勤労奉仕は、9時に現地集合、4時位には解散でしたが、国旗掲揚に始まり、宮城遙拝、勤労奉仕の後は国旗降下で終わるといった感じでした。

西中洲の県公会堂において右翼団体主催によるキリスト教撲滅演説会が開催され、キリスト教学校の廃止などが提唱され、これにクリスチャンや西南の学生たちが反対して混乱状態となり、警察沙汰になった事件が起きたのもこの年です。

この年、私にとっては忘れられない事件が起きました。学校側が「犯罪防止のために通学服に名札をつける」「学力向上のために進学クラスと教科不適格クラスに分ける」の2点を実施することにしたのです。当時私は中学部の5年生でしたが、そうしたことは、生徒の人権を軽んじるものだ、キリスト教の教えに反するものだと断固反対し、生徒全員に「全生徒不登校で反対しよう」と呼びかけ、実際に70人近い生徒が私に賛同して不登校をしました。私はこのことで、退学処分になりかけましたが、私に賛同した生徒たちや父母の方たちの陳情で、退学は免れました。その時のクラス主任

の今泉威雄先生の涙が今も忘れられません。

■1941(昭和16)年 英語の授業も様変わり

太平洋戦争勃発の年です。私が高等学部に入學した年でもあります。西南学院高等学部の創立は1921(大正10)年ですから、この年は高等学部創設20周年に当たります。『高等学部創設20周年記念論集 西南学院論叢』が学生全員に配布されました。E.B.ドージャー先生や波多野培根先生、坂本重武先生、藤井泰一郎先生などそうそうたる先生方の論文が載っていました。

西南学院高等学部は創設20周年を迎えたのですが、社会の状況は、いよいよ戦争の色が濃くなって、国の命令によって「言論・出版・集会・結社等臨時取締法」という法律が施行され、表現の自由が抑圧され、学内でも反戦に結びつくような言論や活動はいっさいできなくなりました。西南は、特に目の敵にされ、学内では特高(前述)が常に目を光らせて



1941(昭和16)年のはじめ。国の命令により九大と西南の高等学部に航空部を作るよう命令があり、急速編成された西南の航空部メンバー。配属将校と共に。後列左から2番目掛け軸の前が吉田さん。



1941(昭和16)年、今津航空隊(大日本青年航空団)で、飛行機の整備をしている吉田さん。高等学部1年の頃。

いましたね。こうした政府の統制に耐えられないで関東や関西の大学に移っていく先生もいました。私は英文科だったのですが、基本的に英語は敵国語ということで英語を使おうものなら非国民呼ばわりされました。英語の授業時間も少なくなって、代わりにドイツ語の時間が増えましたね。英作文では「元寇の役」や「乃木大将の少年時代」等が教材に使われ、「日本海海戦」等の日本文を英訳したりしていました。

それからこの年の初めに国から九大と西南(高等学部)に航空部を作るように命令がありました。西南でも急遽、航空部が編成され、私も参加しました。合計で17人でした。西南大航空部の正式な創部は戦後かも知れませんが、これが、西南の航空部の草分けと言えるかもしれませんね。私は中学部のときから雁ノ巣の飛行場で飛行機の操縦訓練もしていたのですが、病気をしたりしたこともあって、整備士になりました。

■1942(昭和17)年・1943(昭和18)年 先生たちの努力で危機を乗り越える

戦時中の学生生活で記憶しているのは、勤労奉仕ばかりやらされたことです。長いときは20日間くらい早良区の脇山や入部の農村に泊り込みで農作業に従事させられました。勉学よりも食料確保の方が優先で、もう授業どころではないという雰囲気でしたね。高等学部のチャペルも戦争が始まる前までは、全校生徒出席のもと、週2回のチャペルが守られていました。確か10時位から始まっていたように記憶しています。聖書朗読、賛美歌斉唱、そして先生が交代で講話をされました。それが戦争が始まると、週1回になって出席も自由になりました。戦前、中学部では、毎朝40分くらい朝礼を兼ねてチャペルが行われていましたが、戦時中どうなったのかは分かりません。

この時期、私たち学生も十分な勉強ができなかったし、繰り上げ卒業させられて大変でしたけど、西南学院もアメリカからの経済的な支援が全くなくなって経営的に非常に苦しかったと思います。それに文部省からは他の専門学校と統合するか、さもなければ廃校せよという指導があって、本当に存続の危機であったと思います。当時の水町義夫先生や杉本勝次先生、波多野培根先生などの苦労は並大抵ではなかったと思います。そういった先生たちの努力がなかったら、あのとき西南はなくなっていたかもしれません。

戦前、戦中の苦しい時代でしたが、西南学院の教職員・学生・同窓生が強い絆で結ばれていたから大きな困難を乗り越えられたのだと思います。これからもその絆を大切にしたい、そして、そうした苦しい歴史を乗り越えて今の西南があるということも忘れないでいただきたいと思っています。